

M-GTA 研究会 News letter no.50

編集・発行：M-GTA 研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：grounded@ml.rikkyo.ac.jp

研究会のホームページ：<http://www2.rikkyo.ac.jp/web/MGTA/index.html>

世話人：阿部正子、小倉啓子、木下康仁、小嶋章吾、坂本智代枝、佐川佳南枝、竹下浩、
塚原節子、都丸けい子、林葉子、水戸美津子、三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

<目次>

◇近況報告：私の研究

◇第 55 回定例研究会のご案内

◇編集後記

◇近況報告：私の研究

貝塚 耀子（白百合女子大学大学院）

皆さま、初めまして、私は白百合女子大学大学院で発達臨床心理学を勉強しております貝塚 耀子と申します。現在修士、2 年に在籍しております、修士論文の締め切りを 1 月半ばに控え、かなり焦った状態にあります。

私の研究について簡単にご説明させていただきます。テーマは『摂食障害回復者の子どもを持つ母親の心的変化のプロセス』です。私は、摂食障害の家族会に参加しており、その中で、治癒していく方々と遷延化していく方々の違いは何なんだろうと素朴な疑問を持ったことが、この研究の始まりでした。娘さんのひどい行動化の最中にあるある母親から、「真っ暗なトンネルの中にいるようだ」という声をお聞きして、その真っ暗なトンネルから抜け出す方法を簡単に図式して示す方法はないのだろうかと考えたのが、M-GTA を使って研究を試みようと思ったきっかけでした。

今年の夏の初めにインタビューは終えたものの、分析の仕方がさっぱり分からず、木下先生の著書を読みながら分析を進めてはみたものの、よく理解することが出来ず、データを切り貼りしただけの薄っぺらな概念ばかりがいくつも出来てしまい、これは絶対に違うという思いでおりました。そこで思い切って、この夏、岡山で開かれた M-GTA 研究会の全国大会に参加させていただきました。そちらで開かれたワークショップでは実際のデータをお借りして分析の仕方を少し教えていただく機会を得ました。やはり、自分のやってい

た方法が違うということがよく分かり、尚更途方にくれましたが、ワークショップで指導をして下さった東大の山崎先生にご意見を戴ける貴重な機会を何度か得られまして、何とか初めから分析をし直している最中です。

山崎先生を始め、M-GTA の研究会の皆様には感謝の思いでいっぱいです。なんとか分析をし終えて、インタビューに応じて下さった患者会の皆様の思いを無駄にしないようにしたいなと考えております。

しかし現実、厳しく…、今日も、表わしたいことを端的に言える概念名は何なのか、この概念に繋がるところはどこなのか、パソコンを前に頭を痛めております。皆さまの前にお披露目できるような研究に仕上がることを祈りつつ作業を進めておりますが、今のところ辿り着く前に締め切りが来てしまいそうな気配です。

.....

加藤 基子（埼玉医科大学保健医療学部看護学科 地域看護学領域 在宅看護学教授）

10 月なのに冬なのかと思うほどの冷えこみです。台風が去った後も、台風一過の秋晴れを眺めることはかなわないようです。今日は 10 月 31 日、皆様、科研費の申請は、もうお済みでしょうか？

今までも、これからも、私を研究に向かわせる原動力になっているのは、“どうにかしたい、どうにかならないか” という思いです。この思いの対象は、「寝たきり状態にあるお年寄り達」です。20 年以上前になりますが、ベッドから動けない、自分で自分を整えることが困難なお年寄りが、病院でも在宅でも、累々と、という状態でした。私はこの方々から老年看護のいろはを教わりました。と同時に、ベッドの上で身動きできず、じっと“待っている姿”に、悔しいだろうナ・辛いけと受け止め、自分の深いところで、怒りに近い感情が今もとどまっています。

研究は、①訪問看護師がおこなう看護の質の担保の必要性を感じて、在宅ケアアセスメント法の開発（修士→博士論文）、②訪問看護を利用している脳血管障害者に関する実態調査（平成 14～17 基盤研究(c)）、③在宅での生活を開始する時期からおこなう中重度の脳血管障害者にたいする訪問看護プログラムの開発（平成 18～19 基盤研究(c)）、④在宅で生活している中重度者への通所看護の実施（加藤, 安藤, 他 介護事業所における小規模多機能化事業（通所看護等）の開発・普及事業 2004）をしてきました。現在は、③の延長線上の研究をしています。

M-GTA との出会いは、名古屋市立大学大学院看護学研究科の院生指導です。院生と准教授と私の 3 人で、木下先生の著書や M-GTA で書かれた論文を読み合いながら 1 つ 1 つ進めました。修論提出後も約 2 年間、一緒に検討してきました。この論文は日本看護研究学会誌 33 巻 4 号に原著で掲載されました。このプロセスから、多くのことを学びました。今度は、

私が M-GTA を実施する番です。上記③の訪問看護プログラムを用いて実施した看護のプロセスについての研究を、今年度中にスタートさせます。今後、中重度の障害がある在宅脳血管障害者へのケアを豊にするための方略を、量的研究・M-GTA など組み合わせて、探していきたいと考えています。

.....

神田 雅貴（川島町教育委員会 生涯学習課 社会教育主事）

私は、町の教育委員会職員として社会教育の実践に携わっています。社会教育とは、学校教育以外の全ての組織的な教育活動のことです。実は図書館や公民館は社会教育施設ですし、PTA、子ども会も社会教育活動であり、日常生活に密着した領域なのです。

社会教育の活動の1つとして、いわゆる教室・講座があります。私が初めて教育委員会に配属された時、どのように講座のプログラムをデザインするか、指導できる同僚が誰もいなかった経験があります。その理由として、元々、社会教育にはプログラムデザインのための実践的な理論が、ほとんど無かったからです。そのため、各地の事例を参考に「カン」を頼りに、実践するしかなく、大変苦労したことがあります。

一般的に、行政の職員は3年前後で異動があり、経験を重ね「カン」が成熟するには時間が足りません。そのため、現場にスペシャリストがなかなか育っていきません。この現状を改善したいと考え、平成20年に聖学院大学大学院に入学しました。そこで幸運にも山崎浩司先生の講義を受けることができ、M-GTAを分析手法に採用して「父親の子育て参加意識を高める社会教育プログラムの考察」を修士論文として書くことができたのです。

さて、研究成果の実践への応用ですが、父親を対象とした講座を企画する際は、研究結果で得られた「コツ」を抑えながら、プログラムを組み立てることができるようになった効果があります。また、同僚がプログラムを組み立てる時には、具体的な助言ができるようになったと思います。しかし、研究成果の解説者である私が関与しない実践の場合、第三者が研究成果を応用するには、課題が多いようです。なぜなら、自戒の念も込めて、現場実践者は研究成果を読んでいるような、余裕はあまり無いからです。

今後は研究成果を実践にいかにかに生かしていくか、その結果をいかにかに研究に還元していくかの、研究と実践の循環に視点をあて研究を継続していきたいと思っています。

.....

菊地 真実（早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程）

はじめまして。私は現在、調剤薬局で薬剤師として勤務しながら、修士課程に在籍し、業務と研究の二足の草鞋をはく日々を過ごしております。

薬学部は臨床教育に重点を置く 6 年制教育へと移行し、医療人としての態度教育の強化が唱えられ、薬剤師という職業が、これまでの「薬」というモノを扱う職業から、薬を服用する「人」をしっかりと意識すべき職業という認識が強まっています。とはいえ、実際の臨床現場では、がん末期の患者さんのように死を前にした方への対応や、患者さんへの精神的サポートの困難さを感じていることが最近の調査で示されました。それは私自身が現場で感じている困難さでもありました。

そこで、私は現在、ご自宅で終末期を過ごされるがん患者さんと関わる薬局薬剤師の方を対象にインタビューを行い、在宅という臨床現場で、薬剤師がどのような経験をし、周囲との関係性の中でどのようなことを考え、そして現在患者さんに関わっているのかという現状と、抱える問題点を明らかにすることを目的として研究に取り組んでおります。昨年は木下先生の本を何度も読み、そして実際の論文に触れながら分析方法を学びました。また、今年の夏には倉敷での合同研究会にも参加させていただきました。現在は、大変苦労して作り上げた逐語録をもとに、概念生成を行っており、常にデータを意識しながらの生活を送っています。分析テーマをいつも頭の片隅におきながら概念を生成し、概念間の関係を頭の中で描きながら分析を進めているところです。そして夏の合同研究会でのグループワークが、分析を行う上で非常に参考になっていることを実感しています。分析作業はデータと向き合う集中力が求められ、非常に根気のいる作業ですが、そんな中、概念間の関係がぼんやりとでも見えてきたときにとりわけ面白さを感じます。十分な時間のない中での懸命の作業ですが、なんとか頑張りたいと思っています。また、今後は薬学という学問分野においても、M-GTA を使っての研究が行われることも期待しています。

今後ともよろしくお願いいたします。

.....

◇第 55 回定例研究会のご案内

【日時】12 月 4 日(土) (13 : 00～18 : 00／最大)

【場所】立教大学 (池袋キャンパス)

【内容】

第一報告

【題目】保健師による児童虐待予防：境界性パーソナリティ障害と思われる親から幼い子どもを一時保護に導く支援プロセス

【報告者】 松村 ちづか (埼玉県立大学保健医療福祉学部)

【スーパーヴァイザー】 水戸 美津子 (自治医大)

第二報告

【題目】母親が成人期の子どもの自立を受け入れていくプロセス

【報告者】大島 聖美（お茶の水女子大学大学院）

【スーパーヴァイザー】 小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）

第三報告

【題目】精神科病院におけるソーシャルワーカー(PSW)の役割形成プロセス

【報告者】岩本 操（武蔵野大学人間関係学部）

【スーパーヴァイザー】 小嶋 章吾（国際医療福祉大学）

※参加希望の会員は、以下 URL からご登録下さい。期限は 11 月 20 日です。

非会員の方には、人数に余裕がある場合、HPにて参加登録方法をお知らせしますので、このURLを非会員にお知らせにならないようにお願いします。

宜しくお願い申し上げます。

<https://ssl.formman.com/form/pc/b3CxMmk5a5Nz3ngQ/>

◇編集後記

・NL も 50 回目となりました。会員の皆様の声を掲載することができて嬉しく思っています。これからも、いろいろな方から声を聞かせていただきたいと思います。どうぞ、ご協力お願いいたします。（林）

・あれほど暑かった夏が過ぎたと思ったら、いきなり寒い冬となりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。読書や食欲の秋が恋しい、と言いますか、もう少し徐々に涼しくなっていっても良かったのではとしみじみ思う今日この頃です。毎朝服装に悩まれる方もいらっしゃるかと思いますが、ご健康にはくれぐれもご留意くださいませ。（竹下）

・今号のNLは近況報告特集となりました。ワークショップ、たいへん参考になったと言うコメントがあって、うれしかったです。また、みなさんのご研究にたいへん興味をもちました。ほんとうにいろんな分野にこの研究法が用いられているんだと実感しました。会員数もすでに 300 名を越え、お互いを知る機会があまりないのですが、こうして近況報告で研究内容などをお知らせいただけると親近感もわいてきます。（佐川）